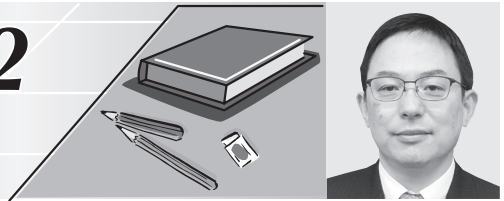


学生時代と図書館 112

「蔵書検索-いま・むかし」

菱川邦俊



2020年にロシア語学科が開設されるのに合わせて前年のオープンキャンパスでは、図書館展示会のオブジェとしてロシア語のタイプライターが展示された。これは、かつて本学図書館でロシア語の蔵書目録を作るときに使われていたものである。

そういえば、かつてはタイプライターを使っていたなあ、我が家にもまだあるぞ！とか、蔵書目録もよく利用したなあなどと、使っていた当時のことが懐かしさとともに思い出された。

私が学生だったころは、蔵書目録が紙のカード型から電子化へ移行される過渡期だった。和書や欧文の洋書は学内のコンピュータで蔵書検索ができるようになっていたが、さすがにロシア語の文献は電子化されていなかった。そこで大いに活躍していたのがロシア語でタイプ打ちされた「カード目録」だった。著者のアルファベット順に並んだ膨大なカードから目的の書籍名とその配架場所が記されたお目当てのカードを探し出し、それをメモして目的の書籍にアクセスするのが常だった。目的の書籍を探し出すためにカードを一枚一枚めくっているうちに、こんな本もあるのか、あんな本もあるのか、と本来の目的から逸脱して、タイトルからいろんな本の内容に思いを巡らせたこともある。今ならさしづめネットサーフィンの感覚だろうか。

今日のように学内外の図書館の蔵書検索が手軽にできるようになったのは、世の中にパーソナルコンピュータやインターネットが普及しはじめてからのこと。それまでは、必要な文献にアクセスしようとするれば、まずはどこの大学・機関にその目的の書籍があるのか、あたりをつけたところからスタートしなければならなかった。所属する大学の図書館に目的の書籍があればよいが、ないとすると、それはそれは一大事であった。そもそもその書籍がどこにあるのか。果たして日本国内に存在しているのか。指導教員に相談をして、その書籍の存在のありかを発

見(!)し、紹介状を書いてもらい、他大学の図書館を緊張しながら訪問したり、その蔵書のある大学に通学する友人を引き連れて、その大学の図書館を訪問したりしたこともある。一冊の本やジャーナルにアクセスするまでに膨大な時間や労力を費やしていたのだなと改めて実感する。まさに人海戦術。人と人とのネットワークが有効な時代であった。1990年代にインターネットの普及によってオンライン蔵書目録の「OPAC (Online Public Access Catalog)」が構築され、このシステムによって目的の書籍がどこの大学図書館や公共図書館にあるのかが横断的にわかるようになったことは画期的なことである。

ところで、冒頭で紹介した本学所蔵の年季の入ったタイプライターを拝見した際にも感じたのだが、本学図書館にはロシア語学科ができる何十年も前からロシア語を駆使し、外国語大学としてふさわしい数々のロシア語関連書籍を蒐集してくださっていた先人がいたことに感謝の念を抱かずにはいられない。先人の明に長けた先人にお礼を述べたい。この蔵書の蒐集にあたられた方はきっとロシア語学科の開設を喜ばれていると思う。我々後人が大いに活用したいものである。本学図書館にはありがたいことに「ロシア語図書書誌データベース」も存在する。「カード目録」から世代交代した「蔵書検索システム」を最大限に駆使して、皆さんも知識の宝を掘り当ててほしい。

パーソナルコンピュータの普及とともに姿を消していった「タイプライター」や、片手に収まるほどの大きさ(縦75mm、横125mmが標準)をした「カード目録」。どこへ姿を消したのだろうか。知識の探究に疲れたら一休みして、本学図書館内のどこかに今も存在するロシア語タイプライターやカード目録の痕跡を探してみてはいかがでしょう。

ひしかわ くにとし(教授・ロシア語学)